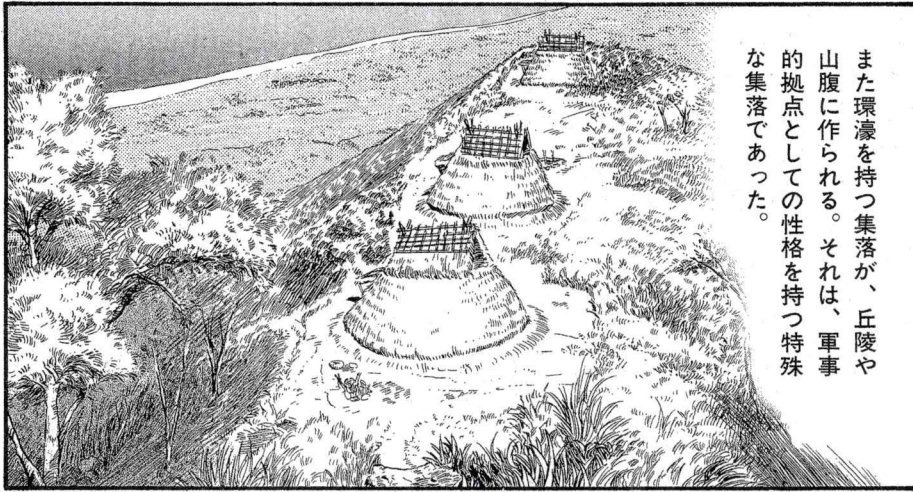


● Culture



また環濠を持つ集落が、丘陵や山腹に作られる。それは、軍事的拠点としての性格を持つ特殊な集落であった。



一九八四年、島根県斐川町の荒神谷遺跡からの多量の武器・祭器の発見は衝撃的であった。強大な地域的権力が、西日本各地に形成されつつあったことの証左である。

石森章太郎「新装版マンガ日本の歴史」 秦・漢帝国と邪馬台国」（中公文庫）© 石森プロ 弥生時代、農耕などの生業が発達し、様々な集落が営まれた社会が描かれる

「高地性集落」用語見直しも

高地性集落を巡る議論では、これまで「高地」と「低地」が明確に定義されてこなかったという。高低の2区分だけで集落を分類するのは限界があるとする意見も多く、用語自体の見直しや再定義の必要性が主張されている。

近年は高地性集落の眺望の良さをデータ化する研究がみられ、比較的標高が低くても、高地と同程度に見晴らしが良い集落が多いことがわかってきた。「見晴らし」

という点で、単純に高地と低地を区分することは難しくなっている。

また、各遺跡の特徴や出土品は様々で、分類や分析は十分ではないという。柴田教授は、様々な生業のために高地に移った人々が住んだ遺跡を「山住みの集落」と定義。一方で環濠や武器の出土など特異な特徴を持つ遺跡を高地性集落と区別して成立の背景を探る必要性を指摘している。



紫雲出山遺跡は、標高352mの山頂にある。眺望が良く、海上からのランドマークだったとする説がある＝柴田教授提供

柴田教授は「集落形成の多様な背景がわかれば、将来用語の見直しにつながるかもしれない」としている。

* 歴史研究が深まるにつれて日本史のトピックは見直されています。「日本史アップデート」では、研究成果を反映した最新説を、広く知られた従来説と比較しながら紹介します。「世界史アップデート」と隔週で掲載の予定です。